

特集「環境破壊と人類の未来」

Theme: The Destruction of the Environment and the Future of Humankind

対談

環境と人間

日本人の考え方をめぐって

吉良竜夫 + 森本健一

湖と人間の暮し

森本 私は現在、世界でも富栄養化が最も進んだ湖の一つである諏訪湖を主な対象として、水域の富栄養化現象の解析を行っています。今回、吉良先生が所長をしていらっしゃる琵琶湖研究所を初めて訪問したわけですが、あの有名な「琵琶湖周航の歌」の作者である小口太

郎は私と同じ岡谷市出身で、その生家はいまだ諏訪湖のほとりにあります。

この琵琶湖の周辺は近江八景という風光明媚なところであり、いろいろな文化を育んできた場所です。琵琶湖自体も、四百万年から五百万年位の歴史を持つ世界最古の湖の一つで、非常に多くの研究がされてきており、一九八四年には、世界湖沼環境会議が琵琶湖で開催されています。

ところで、閉鎖性水域の典型である湖は単なる水たまりではなく、周辺住民の心を写す鏡のような存在である、と考えられると思うのですが、湖と人間との関わりあいというものについて、先生はどうにお考えかを、まず初めにお話していただければ、と思うのですが……。

吉良 いろいろな面があると思うのですが、やはり湖というのは海と違って、面積が限られていますから、それほど文明の力を持たなかつた頃の人間にとつては、交通に使うにしろ漁業に使うにしろ比較的手ごろに利用できる自然であった、ということが大きな意味をもつたと思いますね。



森本健一氏

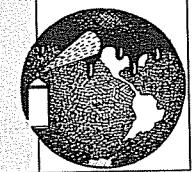


吉良竜夫氏

森本 たとえば、かりに、滋賀県に琵琶湖がなかつたとしたら、大きく歴史というものが変わっていたということはいえますね。

吉良 それはそうだと思いますね。琵琶湖は日本の古代国家ができた、ちょうどその地域にあるわけですから、琵琶湖がなかつたら、随分歴史は変わっていたでしょうね。

森本 同じことは、もし諏訪の地に諏訪湖がなかつたら、この間、マスコミをにぎわしたように、織田信長と天下を争つた武田信玄の柩が湖底に沈められているかもしれないという形で、現在の我々に中世のロマンを語り



かけることもなかつた(笑い)、ということからもいえますね。その意味でまさに湖は集水域全体の結果の産物と

考えられますね。

吉良 そうです。その決算が湖に出るわけです。

森本 で、その湖周辺の人間の暮しぶりがもたらす結果が、浅い湖では比較的早く出るし、深い湖ではなかなか出にくいということはありますね。そうしますと、琵琶湖の場合はたまたま浅い南湖と深い北湖とから成っているわけです。

森本 栄養段階でいきますと、南湖は富栄養湖、北湖は中栄養湖となりますでしようか。で、北湖の場合は、中栄養湖でも貧養湖に近いか富栄養湖に近いか、どちらになるのでしょうか。

吉良 まあ、何を目安にするかによって判断は違うと思うのですが、生産力でいいますと“中”からもう少し“富”の方へ寄っているのではないか、という感じがしないでもない。しかし単に透明度とか窒素やリンの濃度から見れば中と貧との間ということになるのではないでしようか。

森本 南湖は水深が四メートル位でしょうか。

吉良 平均で三・五メートル、最大の水深で七・八メートルの所もありますね。

森本 そうすると、ちょうど、諏訪湖のような感じですか。

吉良 あります。いたって浅いですから。ただ一方所だけ人工的に深く掘った窪みがありますが、その底だけは夏は無酸素になります。

森本 諏訪湖の場合は水深六メートルの湖心のところに定期観測点があるのですが、夏になりますと、もちろんあれほどのアオコ(植物プランクトン・藍藻)が出るわけですから、結構、無酸素層が生じてくるわけです。だから、琵琶湖の南湖も静かな日が続いて汚染が進めば無酸素層が出る可能性というのはあるのではないでしようか。

吉良 もちろん、それはあるでしょう。そうなつてほしくはないのですが。

自然のシステムと人間

森本 今の湖と人間の関係を一般化して、いよいよ、本論に入りたいと思いますが、人が自然環境と接した場合に、自然をどう捉えるかは同じ対象を見ている場合でも、その人の持つ価値観によってかなり異なつてくるよう思います。たとえば、同じ木であっても、開発業者的人にとっては邪魔ものになるでしょうし、芸術家は枝振りのような形を見るでしょうし、木こりは幹の太さを見るでしょうし、詩人はそこに神秘性を感じるかもしれません。また、先生の場合は葉面積指数という側面から捉えられる(笑い)というようなことがありますね。また、木は人間にとつて有用か無用か、というだけではなく、鳥や虫の生活とか、水や土壤や大気とも密接に繋がっているわけです。こうした、自然界のすべてのものが互いに繋がっているという観点が環境問題を考えるときには必要であるように思うのですが、先生が言われている、自然システムの生態学的認識、ということについてお聞かせ願えればと思うのですが……。



対談中の両氏

吉良 大変大きな問題ですけれども、「環境とは何か」という、環境に対する考え方は、それにコミットした学問、たとえば、地理学や生態学などが生まれてから今まで、だんだんに変化してきていると思うのですね。最初の頃は、環境は人間や生物と切り離されたもので、一方的に人間や生物に対して影響を及ぼすものとして認識されていました。ところが、そうではなく、その環境を認知する主体がなければ環境の概念は成り立たないということが明らかになり、しかも、主体は一方的に環境から影響を受けるだけではなく、自分自身の活動によつて環境をどんどん変えていくものであつて、結局、人間や生物である主体と環境との関係は相互作用的なシステムである、という認識が出て来たわけです。

生態学や人文地理学で同じような認識が生まれて、かつてのようないくつかの環境決定論が強く批判される時代が来るわけです。このように、主体と環境との相互作用的な関係が強く意識され始めた頃は、主体が違えば環境も違うんだ、という点がとくに強調されて、たとえば極端な例としてユクスキュルのような人は、一人一人の人間や個々

概念ができる。彼に似た、同じようなホーリズムの

思想は他にもあつて、たとえば、今西錦司さんは「生物全体社会」という言葉を使つています。しかし、それらはある意味ではガイアによく対応する概念ではありますが、ラブロックほど自然科学的な裏付けをもつて地球全体が一つの自己調節系であることを主張した人は初めてですね。

森本 で、先生は岩波講座の『転換期における人間』というシリーズの「2 自然とは」の中で、人間の自然に対する認識や影響について、AからDまでの四段階のレベルに大別されていますね。つまり、Aが宇宙空間の自然システム、Bが地球のシステム、Cが生物圏のシステム、Dが地域生態のシステム、というように、スケールの大きなものから小さなものへと分けて考えられています。また、自然のシステム、とくに生物の関与するシステムである生態系は、基本的に保守的な性格を持つていて、さまざまなファードバック制御によつて、その構造と機能をほぼ一定に維持しようとする性質を持っているというか、一定のバランスをとろうとする性質を有して

いる、とも述べられています。

そこで、このファードバック制御によつて一定の構造と機能とを維持しようとする自然のシステムの性質といふのは、先生が大別された四つの段階のそれぞれに共通して存在しているのかどうかについて、お聞きしたいと思います。

吉良 あの四つのレベルは、論文の中にも書いておきましたが、必ずしも厳密には、DはCのサブシステムであり、CはBのサブシステムであるというようにはなつていませんけれども、全体として大体そういう分け方になつてます。大きなシステムがあり、それは幾つものサブシステムに分割可能であつて、それらのサブシステムはまたその中が幾つかに分かれます。そしてそれらのサブシステムの各レベルで自然のバランス的な自己調節機能があるということは、これは間違いないと思います。

森本 自然界のバランスを保つ仕組みがいろいろなレベルであるということを承ったわけですが、このことは人間の身体についても単細胞と多細胞との間にあつて、一個の細胞が多細胞とバランスをとつて一つの形態を保

の生物はみなそれぞれ違う環境を持つてているのだと主張したのです。この考え方そのものは、今でも別に間違つてゐるわけではないのですが、今のような地球規模の環境問題が発生する時代になつてきますと、それだけでは、環境を考え、扱つていくのに不十分であつて、要するに、地球上にある人間や自然をすべて含めた全システムが環境であるという認識にだんだんなつてきつつある、と思つたのです。

森本 たとえばラブロックの「地球生命圈」(ガイア)というような主張はいま先生のいわれた認識や考え方につじるものがあるかと思いますが、あの主張はどのような経緯でなされたのでしょうか。

吉良 彼はもともと化学者で、自然学者ですから、彼の提唱しているガイアというのは、哲学者が頭の中で到達した概念とはちよつと違うのです。私は一般向きに書かれた本しか読んでいませんので正確なことは知りませんが、彼がガイアという概念を提出した裏には非常に具体的な、どの微生物がどこでどのように働きをしているか、というような話が基礎になつていて、その上に

つているところにも見られるわけですね。そうしますと、このバランスを保つ仕組みというのは、自然の生きている一つの証しというか、自然にはバランスを保つ力がある、というように考へてもいいのではないか、とも思うのですが……。

吉良 まあ、どちらの側から見るかの問題ですけれども、そういうバランスを保てるようなシステムでなければ長く地球上では存続できない、従ってそういうシステムだけが進化の結果存続してきた、ということになるでしょう。

森本 自然界にいろいろな生物があります、それらがそれぞれ互いに役割をもつて繋がっているわけです。それで、生命的の発生においても、マルグリスあたりは共生説を主張していて、鞭毛や葉緑体とかが共生して一つの生命体を作った、と言っていますね。このように、生命そのものを成り立たせているのは、多くの生命の共同体といふか役割分担によつてであると思うのですが、たとえば、牛のルーメン(反芻胃)なんか栗原康先生の研究からいえば、内容物一。あたり十億のバクテリアと百万の原

生動物が含まれている。また、シロアリは、セルロース分解菌とか窒素固定菌とかを持つていて、さらには、スプーン一杯の土の中には百億ですか、その位の微生物がいる……。

吉良 微生物のオーダーでしたらそのくらいになるでしょう。

森本 ですから、自然においては、やはり目に見えないところにいろいろな生物がいて機能を發揮しているんだという、そのような捉え方をしていかないとダメだと思つのですね。

今日のように衛生観念が発達することによって、たとえば土を完全に滅菌、殺菌するとか、というのではなく、わざ自然のシステムから反したことになるのではないかな、と危惧しているのですが……。

吉良 全くその通りなんですが、医学というものは人間の命を守るために発達してきて、それがだんだん清潔第一というか、滅菌的医学になつてしまつていて。よく“自然が健康でなければ人間は健康でなければならない”などと格好のいいことを言いますが、医学の持つてゐる

滅菌思想と自然の健康さというものは全然逆のものですからね。双方がだんだんぶつかつて矛盾をはらんできているような気がするのです。そのうち、今でも人工臓器や凍結卵受精の問題がくすぶつていて、何らかの形で医学の進歩と自然の法則性とが衝突するのではないか、と思うのですね。人間が他にやつてゐる工業活動のようなものは初めから自然とともにぶつかつていてが、医学の面はやや遅れていた。しかし、だんだんそこでも矛盾が起つてきましてね、われわれ人間は思想的な割り切りというか、対決というか、それを迫られているような気がするのです。

この問題は難しくて、私にはどこに落ち着くのかよくわからぬのですが、いつたい人間の欲望というのは何だろうというところにきてる、という気がしますね。

森本 どちらかといえば、農業も土を離れて水耕栽培とか農薬を使って植物を育していくとか、水に関しても戦後アメリカの指示によつて塩素消毒をやつてきた、それがまたトリハロメタン(有害な有機塩素化合物)のような問題を引き起こしている。また、我々の子供たちも無菌

状態の生活の中にいて、たとえば、食べ物でも、滅菌したものとか、火を通したものを見て育つてくることは可能であつても、では実際に生き残れるのか、といった場合には、やはり下痢などをして抵抗力や免疫力をつけたこそ生き残れるようになると思うのです。今の文明の流れはそのような自然のシステムからはずれ、逆転して、すべて自然を捩じ伏せていく、というところがあるのではないでしょうか。

吉良 しかし現実問題としては、その方が平均寿命が延びてゐるわけですよ。人間の願望からすればやはりその方がありがたいわけですし、人間の文明は自然からの脱却を目指にして発達してきたところがありますのでね。

自然との食い違いを言うことはやさしいのですが、では、人間の生き方をもう一度自然流に帰すことができるかというと、それは無理ですね。ただし、まだ今の世の中では、今おっしゃったように、子供たちはできるだけ衛生的に育てられたとしても、結局は雑菌が入つて来て下痢をしたりして、それに耐えていかなければ生き延び

られない。

だからそういう意味では、今のところは、まだ人間はある程度まで自然の法則の中で暮らさざるを得ません。しかし、どうもそれがだんだん完全に滅菌温室の中で育つようになつていきそうな感じですね。そこでどうしても人間は、ある種の思想的な対決をせざるを得なくなるのではないでしょうか。

森本 私も学生によく話をしますが、「蚊帳」って知つてているかといえば「知らない」と答える。昔は人間と蚊とが共生(?)していたのだと説明し、いま君たちがハエや蚊を見るとどうするかといえば、すぐ殺虫剤をかけるというのですね。昔の魚屋さんだと、ハエとり紙をおいたり、ハエとりトラップのようなものでハエをとつていた。いま魚屋さんが殺虫剤をまいたら大変なことになるのですが、最近はどうも自分の邪魔になる生物、とくに昆虫などはいやだという人が多いですね。

これなども、自然がどんどんなくなつて来た中で育つてきて、しかも塾ばかり行つて勉強だけして自然と触れ合う機会がなくなつてきたことによつて起つてきて

ると思うのです。

この間も、ある新聞社の記者が私を取り材した時、虫は

大きらいだ、どんな虫もきらいだ、というのですね。

吉良 その記者は、環境問題の担当なのでしょう(笑)い。

森本 このような状態が長く続くと、環境と人間といふか、自然と都会の衛生至上主義的生活というか、種の絶滅の問題もそうですが、自然に対する、あるいは生物に対する痛みを覚えないというか、人間だけが生きられればそれでよい、という考え方になつてくるように思うわけです。そういう意味で、子供の小さい時にどういう環境で育つかということは大事な問題ですから、我々大人が積極的に自然を残していくという意志を持たないと、これからますます人間と自然との距離が開いていくようになります。

『実験動物』としての日本人

吉良 特に日本人は、ある意味で実験動物的な方向を向いているような気がしますね。我々のような考え方を

している人間の目から見ると、同じ先進国でも、日本人より他の国の方がよほど健全ですね。日本人ほど便利なもの、衛生的なものに対する志向が極端ではないからです。

これはいろいろなこと、たとえば日本人の民族性みたいなものもからんでいるでしょうが、いわば、世界の

歴史の中で日本が置かれたポジションと関係している

思ひですがね。いずれにしても、今の日本は少し度が過ぎている。これは一体、戻るだろうかどうだろうかと

いうことなのですが、僕は多分戻るのではないか、と思

います。他の国が全部そうであつて、日本がそのあとを追つかけている状況でしたら危ないのですけれども、必

ずしもそうではないでしょう。ですから、日本は外国からの影響に非常に弱いので、あるところで、この流れが少し修正されるのかなという気はしますが、ただそれには長い時間がかかるだろう。その間に一世代か二世代くらいは、行き過ぎた世代ができるかも知れないな、といふ氣はしますよ。

森本 ある時期から、急に雑草も除草剤を使って除く

ようになつてしまつて、最近は雪が降つてくると、融雪剤を使つて雪を溶かそうとする。ドイツなんかは融雪剤を使わないで砂利と塩を混ぜて除いている。日本はなんでもそのような感じで、それは樂をしたいということがあるんでしょうし、また便利だからなんでしょうね。

吉良 そう、便利なこと、要するに樂をしたいんですね。

樂をしたいのは人間誰でもそうなのです。ヨーロッパの人々だって便利な生活をしたいのは日本人と同じだと思うのです。しかし、彼らにはかなり強くいろいろ形の制約がかかっています。宗教的なものや倫理的なものなど、欲望に無制限に体を投げ出してはまずいという考え方があるのですね。ところが日本には全然ない。あまり何も考えずに便利だ、楽だ、という感じですね。

森本 近頃、日本の地球環境に対する責任ということが言われていて、原燃料とか食料にしてもどんどん輸入してきて、それをゴミとしてどんどん捨てている。ある人の試算によると、残飯が年間、一千万㌧。これは日本のお米の生産高に相当する量なのです。我々が育つて

きたころはお米一つも無駄にしてはいけないといって育てられたのですが、わずか数十年の間にこんなにむちやくちゃなことになってしまった。こういうような国は世界の他にはないですね。とてもこのまま続けられるものではないでしょう。

吉良 それはね、日本の味方をしていうならば、さつき世界の歴史の中での位置、ということを言いましたけれども、一種の偶然みたいなものがあつて、ある程度やむを得ない事情もあると思うのです。

数十年の間、と今言われたけれど、僕の子供の頃の生活を考えると、わずか六十年や七十年の間に、こんなに生活が変わつていいくものかと思うくらい、変わつたわけですよ。たとえば今中国に旅行しますとね、便所はきたないし街はきたないし、何たることだと思います。しかし、ちょっとと考えてみると、公衆便所が臭わなくなつたのは、日本でもほんの二二十年か二十五年くらいのことです。それまでは公衆便所は汚いものと決まっていて、東京都内でも、入ればすごい臭いだつた。それがなくなつたのは、まだついこの間のことなのです。ところが、

今は中国の便所の臭いがつらくて、もう我慢ができないなっていますね。そのくらい急に変わつたのです。我々が不便、非衛生、貧困というものから抜け出したのは本当に新しいのです。ところがね、西欧の国々は違います。ヨーロッパが産業革命をやって生活程度がどんどんあがつていった頃は、日本の方がヨーロッパに較べてよほど清潔だった。ところが、向こうは激しく変わつていつた。その時にヨーロッパは植民地を持つていたわけです。植民地から吸い上げることによつて、自國に富を蓄積し、産業革命の成果と合わせてどんどん生活レベルを上げることができた。ですから、たとえば、便所の臭氣から逃れたのは我々に比べて古いわけです。まあ、便所をひとつ例にとればですね。

そこで彼らは相当いい生活をし、生活のゆとりができる結果、たとえば自然を大切にしようとか、やたらに環境を損なつてはいけないなどという意識が我々日本人に比べて少なくとも五十年くらいは早く育ち、その意識を充分に蓄積することができた。だから、あまり無茶をしないわけですよ。

ところが日本ははるかに遅く近代化の舞台に出てきましたね、我々がめつたやたらに働いたおかげで、一挙に生活程度を上げてしまつた。しかもヨーロッパの場合よりはるかに技術的に進んだ便利さをいきなり享受することになつてしまつた。日本人にとって、ついこの間までは、自然というものは不便のシンボルというか、人間に脅威を与える恐ろしい存在であつたわけです。その自然から脱出したかしないうちに、一挙に高度な技術を使つた便利な生活に入りました。だから、ヨーロッパ人のようになり長い期間、高いレベルの生活が続いて、衣食足りて礼節を知る”という期間が日本にはほとんどなかつた。だからこういうひどいことになつていると思うのですね。まあ、日本人そのものにかなり軽佻浮薄なところがあることも否定できませんけれども……。

だから、ひいきめで見れば、我々が今こんな生活をしていることにもそれなりの理由はあると思うのですよ。しかし、だからそれがいいということにはならない。こんな無茶な生活が続くはずはないと思うし、必ず反省があるだろうし、世界中から叩かれるなど、いろんなこと

があつて、だんだん改まつてはいくでしようが、たとえば環境意識とか人権の問題とか民主的なものの考え方とかが、ヨーロッパの人並みに日本人に定着するためには、やはり相当な年数がかかるだろうと思うのです。人間の考え方というのも、技術とちがつてそう簡単には進歩しないものですからね。かなりの世代の積み重ねが必要です。やはり向こうに追いつくのに一世代や一世代くらいはかかるだろう。その間に、我々の国土は目の前でめちゃくちゃになつていくし、子供たちは虫は嫌い、朝シャンをしないと気がすまない、というような世代が一代、二代続く。それをどうするか、というのが問題ですね。

森本 自然界のシステムでいくと、ゴミというものは存在せず、排泄物・死骸等はすべて分解されて元素循環で利用されていく、というのが自然の長い間かけてきた一つの知恵ですね。ところが人間の場合は、ゴミを出しても清潔にするために、廃物屋さんがいて分解するわけですが、その廃物屋さんがそれでまた生計を立てているので、これにはお金がかかるわけです。また、リサイクルということが非常に注目を浴びたり、あるいはかつて

の廃紙交換業が採算が合わないからといって廃業したり、というような問題があるかと思います。これなどは自然の循環システムというものを、お金という尺度だけで考えているために、うまくいかないところがある。

結局、日本のような資源小国であるにもかかわらず、ゴミの量がすごく多い、という両極端な結果になってしまっているのです。これを、自分の国は資源小国だから、よそから輸入して持ってきたものは徹底して使い、そしてゴミとしては出さない、という観点を持ったときに日本というのは素晴らしい国になると思いますが、それができるはずなのにむしろ逆のほうに行つてしまっているのですね。

吉良 それはやはり、便利さというのにはなかなか抵抗できませんからね。

森本 お年寄りの世代、私のところにも、母がいるのですが、非常にものを大事に蓄えます。紙一枚でもですね。我々はコンピューターで紙を使って失敗するとすぐ破ってしまう……。

吉良 私も年寄り夫婦で暮しているのですが、とくに

のパルプ用森林に相当するということです。この一年間に使う木材の三分の一が紙に使われている、ということですから、その量の大きさはおそるべきものがありますね。

建築用木材はある意味で耐用年数という形でストックの部分もあると思うのです。しかし、紙としてただ捨てられて燃やされたり、ということになりますと、ペーパーの使用量がますます増えていく。これは将来、森林破壊の問題だけでなく、土壤浸食とか大気や水の大循環にも悪影響が出て重大な結果になると思いますね。

吉良 ともかくコンピューターとワープロとコピー機の三つだけで紙の消費量は一挙に何倍かになつたでしょうからね。これはみんな便利なのです。だからコピーしなくともよいものまでコピーする。

森本 後で読もうと思ってコピーをとつて安心してしまい、結局読まなかつたりする。会社でも文書を一人一部ずつ渡していくというように。昔は回覧ですんだものですがね、今は一部ずつ必ず持つということも大きいのではないでしょうか。

ちょうど一人前になったのがまさに戦争中という世代ですから、ものを大切にすることはしみこんでいる

んですけどね。困つたことに、それでは現代の生活はできない。我が家に流れ込んで来る紙だけでもどうしようもない。不用の紙をまとめて集めていますけれど、それがリサイクルのルートに流れてくればいいんですが、流れないですね、実際は……。新聞紙くらいは喜んで持つててくれますけれども、それ以外の紙はたまつても持つていってられない。本当に暮しにくいですよ。

森本 「だから捨て方というのを学ばなければならぬ」といつた暮し方は、やはり自然に対する冒瀆だと思っています。あるデータで見ると、紙の問題なんかも今ゴミの中ではかなりウエイトを占めていますが、それが嵩としてゴミの処分の問題になつていて、それがあるでしょう。日本では一人一年で二百キロの紙を使つているのですが、これを木材に直すと十五センチの直径で二㍍の材木十六本に相当する、ということなのです。

そして、日本全体では一年間に百八十億本にあたる木材を使っており、これは三重県ぐらいの広さの六〇万ヘク

一人一人の意識変革の重要性

吉良 どうしたら、それをよりましな形に直していくか。どこかの国のように、独裁者同然の人がいてその人が言えばそれが法律になるというような、そういうシステムであればつとり早いのですがね。もつとも、タバコの吸殻やゴミを捨ててはいけないとかそういうことならやれるでしょうが、経済機構がからんでいる問題はどんなに強力な独裁者がいてもなかなかできないでしょうね。

森本 たとえば、新聞の折り込みチラシなどの規制は可能だと思うんですが、ドイツの街角の看板の場合、町並みの景観との関連で規制があるようですから、新聞のちらしを規制したところで大したことはないとは思うのですが、とにかくものすごい量ですね。その中には見るものもあるし見ないものもある、裏が使えるなら子供たちが絵を書くこともできるのですが、裏表びっしり印刷されていますからね。そしてただゴミとなる。

吉良 私のところは、滋賀県という土地柄もあるので

すが、入ってくる折り込み広告の半分くらいは建売住宅や分譲住宅の広告なんです。だから既に家を持っている人は全く見ないわけです。結局のところは、強制力をどうだけ使えるかという問題で、たとえばフロンみたいなものでしたら比較的、法的規制ができるかもしれません

が、紙や石油のようにより一般的な消費財は法律的な規制にはなかなかじまない。すると、まどろっこしい話ですが、少しずつ一人一人の人の意識の変革が積み重なっていくようにするしかしようがない、と思いますね。

森本　たとえば、主婦などの婦人層を中心にいろんな環境問題の取り組みのなかで、水の問題でいえば厨房から気をつけましょうと。また、ゴミについても神経を使つていてコストも考えて、ある業者に集団でひきとつてもらうとか、というような動きもあるようですが、やはり、一人が自覚をもつて仲間を集めてこれを拡大していくということが大切であると思いますね。ですからどういう人がどういうことを感じていくかということが一つの大きい鍵になる、と思うのですね。“私一人くらいならいいでしょう”と思うか、“私は頑張る”と思うか、こ

ティックも一緒に燃やせる新しい焼却炉ができて、分別収集がなくなってしまったのです。

良い習慣だと私は思つたのですがね。ただし、現実には相当ひどい人達もいました。きまりを全く無視して何もかも全部一緒に袋に突っ込んで出す。だから名前を書け、ということになるんですよ。カラスが横行していて、ゴミ袋を破るでしょう。するとすぐばれるんですよ。

森本　犬や猫がきてひつかさまわすこともありますからね。

吉良　私のところはいわゆる住宅地域ですから、そんなに全体のレベルが低いところだと思はないのですがね。現実にはかなりひどいものです。

森本　これはやはり、日本が狭いということもありますね。資源をたくさん使うわりにはストックしないところがありますね。たとえば家具一つにしても、よく言われるようく欧米では、造り付けというか、何代も使っていく。ところが日本では、新しいものを買えば古いものはゴミとして出してしまって、それも、自分のところで作つて自分が捨てるならともかく、よそからある意味で

の辺が大きな分岐点になるかと思うのですけれど……。吉良　やはり無力感というものがありますからね。自分一人がいくら頑張つても、いかにそれが小さいことでもあるか、ということを感じざるをえないからですね。そういう人に意欲を失わせないような、システムが必要なのでしょうね。

森本　ゴミの例で面白いのがありますよ。長野県ではとくにゴミの問題に関しても、各自治体でのノウ・ハウがあるようで、たとえば厳しく分別させ紙袋には必ず名前を書いて出す、というような……。もちろん、これを都会で行えば、プライバシー問題にひつかかってとんでもないということになる。

吉良　私が大津に来た時もそうでしたよ。ゴミの紙袋に名前を書いてください、と聞いてびっくりした。余り守られもしなかつたし、反対も多かつたのですが、ただ、大津市の焼却炉があまりよくなかったために、プラスティックと紙とその他の不燃物とを、いわゆる分別収集するという良い習慣はあったのです。ところが、せっかく良い習慣がついていたにもかかわらず、この間、プラス

収奪というか生活レベルが違うところから安く貰つてきたものを、安いものだからといって、どんどん捨ててしまつ。高いものなら大事にするのでしょうか……。こんなものがはたしてゴミなのかと思うものでも捨てられてます。高いものなら大事にするのでしょうか……。こんなものがはたしてゴミなのかと思うものでも捨てられています。

『モースの見た日本』という本の中で、日本の江戸の名残を留める明治初期の頃の話が出てきますが、今と全然違うなと思うんです。たとえば日本人はとても正直である、と言つている。「鍵一つかけない、三千万人の国民の家に錠も鍵もかける戸さえもない事実であり、昼間はすべて衝立たてが唯一のドアであるが、それも十才の子供でもいつでも引くことが出来る、或いは穴を開けることが出来る、貧しい人々も礼儀正しく思いやりを持つ、驚いたことにまた残念ながら、我が国で人道の名のもとに道徳教育の重荷になつてゐる善行や品性を日本人は生まれながらに持つてゐるらしい、簡素な衣服、整頓された家庭、清潔な環境、自然及び全ての自然物に対する愛、簡素で魅力的な芸術、礼儀正しい態度、他人の気持ちに対する思慮、これらは恵まれた階層の人々だけではなくも

つとも一般的な日本人の特質である」と言っていますし、他に日本人はきれい好きであるとか、日本人ほど自然を愛する国民はない(笑い)、などの事例を掲げて非常に日本人をほめている、その同じ日本人が世界でもっとも反対の方向へ行ってしまった。西欧に追いつき追い越せで、日本の足元を見ないで来てしまった感じがしますね。

ヨーロッパの近代化と環境意識

吉良 清潔というと、日本の特性のようなものですが、ヨーロッパでも、中世には、かなり、同じようなことがあつたのではないでしょうか。ヨーロッパ中世では、宗教が非常に強い力を持っていたのに対して、日本の場合は封建制度のもとで身分制度が大きな力を持つていますから意味は違いますが、ともによそから与えられた他律的な力で個人の行動が規制されていた。それで一応の生活の安定が得られていたので、清潔という特性も培われた。つまり、かなりの部分が抑圧で引き上がっていた美德なんですね。それがヨーロッパでは、ある時期になるとほんざれて、町の通りは全部ゴミで埋まっているので、

石畳を敷かなければ馬車も人も通ることができなかつたという段階を一度通つてですね、それから先ほど言いましたように、豊かなヨーロッパという時代になつて一段階上のところへ到達した。つまり一度地獄を通過した上で、一つ上へ進むことができたわけですね。日本は今、いわばその地獄の段階にあると思うんです。ただ、時代が違うので、今のような現われ方をしているだけであつて、文化の発達段階としては、日本はまだヨーロッパの産業革命が始まった頃のような状態に近いところにいるんですね。しんどいですよ、これをもう一段階上へ持ち上げるのは……。しかし、持ち上げないと困るわけです。

滋賀県は、ついこのあいだまでは自然がたくさん残つていて、田園風景の本当にきれいなところでした。それが今めちゃくちゃに壊れつつある。悲しいと思いますけどね。そのように自然の破壊をやっているのはどのようない人達かと、必ずしも、よそからやってきた大資本とは限らないんです。土地の人達自身もやっているのです。田舎だといっても今や町と余り生活は変わらない。

滋賀県はお金持ちの県で、各家庭の平均収入は高いですね。だけど、その人達には、自分たちは田舎にて町とは違う不便な生活を強いられてきたのだ、だから何が何でも都市的にならなければならない、という感覚がしみ込んでいるんですね。それほど、日本人はまだ過去の貧困に近いですよ。その中でどうしたらこの生活を変えてもつとましな日本にすることができるか、本当に難しいと思うんですね。教育の力は大きいと思いますが、少しづつ若い世代から考え方を変えていくほかはない、というのが私の今の結論です。

は、中学では理科の第二分野とか高校では生物になるんです。ところが受験の対象からはずされていて、その勉強はしてこない、ということになる。ですから、自然を見るのは自分にとって利用できるものしか見ないし、その結果も考えない、ということになるのですね。

吉良 それから、まず自然の美しさの認識というものがですね。たとえば、田舎の家の前に雑木林があるて、新緑の時などは本当に美しい。だけど、そこに住んでいる人でそのように思う人はあまりない。それは落ち葉を落とす厄介ものではあっても、ああ、きれいだな、と思う対象ではない場合が多いですね。だから、何か口実ができるて木を切る時には、何の罪悪感もない。自分の庭にかなり大きくなつた木があるような場合でも、しばしばそななるのです。実際に切つてしまふ。親かもつと前の代から育つてきて大きな木になつていてのものを、單に落ち葉の掃除がめんどうだとか、ちょっと突き出した枝が邪魔になるとか、そういうことで簡単に切つてしまふ。

そのようなことがらは、我々はたとえばどういうところで教育されてきたかといえば、私が覚えてる範囲で

ね。ところが植木屋さんが入って手入れした松などは切らない。また、せっかく琵琶湖の岸に本当にきれいなヤナギ林があつて、その下では春はノウルシなどいう花が美しく咲く。それを実際に惜しげもなく切つて、その後に、普通の庭木や花ショウブなどを植える。少し水位が高くなると水がつかるところですから、普通の木を植えでもろくに育たないことは初めから分かっているはずなのですけれども、お金をかけて植えた植物にはねうちがあるけれども、もとから独りでに生えているものにはねうちを認めない。ねうちを決めているのは、客観的な美しさではなくて、一種の経済的なのですね。

ただ、そういう人達を責めることはできない、と思うんですよ。われわれは、ついこの間までは、いわば、自然に押しつぶされたような生活をしていた。それがようやく自然から抜け出せたと思っている。そういう人々も、いつかは、なくなつた自然は本当は美しいものだったのだということに気付いて、自然の価値を見直すようになつてくるとは思うのですが……。

森本 何か西ドイツなどでは、ゴルフ場を造成する場

それで、どちらかが家に帰つてくると、家に居る間は、それこそ必死になつて庭の草取りをすることになるそうです。ドイツのそういうところは大変面白かったのですが、コミュニティからの制約みたいなものが結構強い。かつての日本も、たとえばモースの書いているような時代には、隣近所の手前だけでも、清潔にして住まなければならなかつたわけですね。しかしヨーロッパは近代化の過程で、そういう段階からはかなり早く抜け出たはずだと思うのですよ。

森本 いわゆる、個の確立、という意味ですね。

吉良 そう。ところがそれにもかかわらず行つて見ますと、町並みをそろえることに関しても、一軒だけ飛び出すわけにはいかないような歯止めがかかっているところが多いのです。

森本 それは公徳心によるものなのでしょうか。

吉良 よくわからないのです。一度、コミュニティの制約が壊れて個が確立して、その上で出来た公衆道德のようなものなのか、それとも、昔の伝統をある程度保存しているのか。多分私は、昔のものが残っているのだと

合、たとえば一〇畝の木を切つたら、二〇畝の木を植えろ、ということらしいですね。これは法律なのか経験なのかよくわからないところがありますが……。

吉良 そう、私の知つているドイツの例で、それが法律なのかどうかよくわからないのですが、こういうのがあります。町の郊外でかつては果樹園であったところが分譲地になつて家を建てたんですが、もとの果樹園のリソグの木がちょうど新築の家の庭の真ん中に残つていて、木の格好は悪いし大変邪魔になる。ところが、直径十何^{センチ}以上の木を切るには、市役所の許可がいる。なかなか許可が出ないで困つた、といいますね。そういうことは、多分法律ではないと思うんですが、そのような制約はドイツというところは特に強いのではないでしようか。それから、隣近所からの制約も大きいそうですね。

日本人の女性でドイツ人と結婚してドイツに住んでいる人なんですが、ご主人も奥さんもそれぞれ忙しい仕事を持つていて、世界を走り回つている。一人そろつて家にいないうことが多いので、どうしても庭に雑草が生えてくる。それに対して回りからうるさく言われるそうです。

思います。日本のように後進国として、遅れて個を確立したり、便利な生活に移つていくところほど、社会的にもドラスティックな変化が起つてているのではないか、と思うのですがね。だから、日本よりもう一つ後に出てきたアジアの新興工業国では、一層ひどくなるのではないか、と心配です。

森本 日本よりもっと小さい国が多いですからね。

吉良 ええ、環境問題なども日本がかつて経験したよりもとひどいのを経験するのではないか、という気がしますね。生活全体がいわゆる欧米文明で画一化していくにつれてね。それがいいことかどうかの議論は別にして、世界全体がそうなつてきますからね。東ヨーロッパが軒並みに西欧化していくという時代になつてきましたから、それがますます進行していく。

森本 東ヨーロッパが倒れていった一つの理由として

物がない、ということですね。ですから、大量に物を作つていく社会をみんな目指している、ということですね。吉良 そうです。大量に作り、大量に消費することをみんな目指している。それが、いわゆる個の確立した民

主主義社会とセットになっています。それ自体が地球を破滅させるかもしれないという話は別としまして……。

環境保全とエコ・テクノロジー

森本 そうしますと、一人一人の責任がものすごく大きくなりますね。さきほども言わされましたように、一人がものを大事にするか粗末に考えてどんどん使っていくかの違いが、全体を大きく変えていくことになりますからね。

吉良 そういう点では明らかに、欧米の方が進んでいます。社会の中のかなりの人達が高い環境意識を持つていて、その意識に基づいて行動もするし、新しい技術の開発もするという段階まで来ています。まあ、それが日本にとっては一種の救いでして、かなり早くその影響が“外力”としてやって来ることをある程度期待せざるを得ません。後に続いてくる国々のことを考えると、日本がこのあたりで頑張らないといけないと思いますね。

森本 やはり、環境に対する哲学といいますか、たとえばマンガくて、環境に接する哲学といいますか、たとえばマング

は行かないのでしょうかね。

吉良 個の確立、なんて格好のいいことをいいますけれども、実際は大多数の人間は社会全体の流れに強く影響されながら動いているわけで、流れが人々を環境保全に向けて動き出させることに成功すれば、案外早いのではないか、とも思うんですが。本当は企業がそれをやれば一番いいのですが、日本はまだめなので……。

森本 そうですね。日本は滅びても企業は滅びない、といわれるくらいですかね。収益をあげるために法的規制のゆるい海外に出ていて現地法人を作るくらいですから……。

吉良 このごろ、若い人でもね、外食する時に、ポケットから自分の箸を出す人がいますよ。なかなか格好がいい。しかし、割り箸を全部やめることはあります。たとえば日本の杉の間伐材を使えば、コストは高くなるけれど、量は十分にあって、今は全部捨てているのですから、資源の有効利用になる。”エコ・割り箸”（笑い）を誰かが作って、それが格好いいとなればたちまち右へならえすると思うのです。

ロープとエビもちょうど同じ問題に直面しておりますね。日本においては昔はエビは高級で庶民の手に届かなかつたものでしたのが、今や食傷気味なくらいどんどん安く大量に輸入している。それが実はマングローブの破壊の上に成り立っている。これは『エビと日本人』（岩波新書）の中にも書かれているわけですが、原産地の子供が手を真っ赤にして小さいエビを集めてきて、それを売つて家庭の経済を支えている、我々日本人は買いまくつて食傷気味になっている。そして目先だけで何も考えず、そこにあれば買うし、安ければ買う、という中で、象徴的な話が環境保全型商品についてはドイツはエンゼル・マークというのがついていて、日本でもエコ・マーケがついていますが、多少高くとも環境を破壊しないものを買う、という人がドイツではだんだん増えている。やはり、これはこういうことであるからこうなのだ、という環境問題に対する原因・結果の認識が成り立つと、そのような製品を開発して売れる素地ができると思うのですが、とにかく、安くて珍奇なものを買ひ漁る、というような段階を経ないと、今いつたようなところに

今、日本は世界から袋叩きにあっていますから、そういうことをすればいいのですが、なかなか企業はそれをやらない。日本で今それができる立場にあるのは案外役所なんですね。あまりパッとはしないイベントばかりやつて税金の無駄使いをせずに、他にもやるべきことはあると思うのですがね。

森本 いい意味の補助金を出して環境を守るようになしていくけばいいのですが、河川工事についても、ある住民が自然護岸工法でやつてほしいと言うと、いやコンクリートの方がいい、と役人の方が言ってみたりしている。

吉良 それこそ法律で決まっていますので、やつかいなことはあるのですよ。それと、自然派の一番の泣きどころは、川に出てくる水の変動幅がヨーロッパと日本では一桁違うことだと思います。日本は十倍大きいでしょう。日本では、全国どこでも一日に一〇〇%以上の集中豪雨が降りうるわけです。ヨーロッパではまずありませんからね、そんなことは……。だからヨーロッパだったら、川岸にヤナギを突き刺しておくような自然工法でも護岸ができるかもしれませんが、日本ではむずかしい。

建設省の人たちは護岸の強度ばかり考える。洪水が起きたときに、少し岸が削られたら、それは個人の財産を侵害するわけですよ、日本の場合は。河川敷の敷地が狭いですからね、建設省にとってはそのことが最も怖い。国が補償しなければならない。

一方、自然工法をやかましく言う人々は基礎的な知識がないので、一日二〇〇㍉の雨が降つても、これで丈夫ですよ、とは言えない。双方で対立しているものですから、上手に知恵を出し合つて、その真ん中を探すということができないのですね。

森本 先生はエコ・テクノロジーについても書かれていましたが、これは自然の生態系を生かした技術、ということであると思います。その河川の例で言えば、森の保水性ですか、そうした形のもので、水を早く流すのではなく、たっぷりゆっくり時間をかけて流すとか、エコ・テクノロジーとはどのように応用していけばよいかと考えですか。

吉良 エコ・テクノロジーというのはもう少し範囲を広げてもいい、と思います。自然そのものを利用する」

はプラック・ボックスになつてまして、工場からの重金属も危険物も入る、家庭のものも入る、ある意味で昔では有用であつたものを入れてしまつて、ごちやごちやにしている。まさにエコ・テクノロジーの発想からいくと、これは大きな欠陥を持つていて思いますがね。

吉良 全くその通りですけれども、その前に人間は大都市というものを作つてしまつた。いま言われた中で、工場排水は各工場がちゃんとやるのが当たり前ですね。これはまだまだ技術的に改良しうる可能性はあるでしょう。しかし、その他のいろいろな排水を分別処理するということは、人口密度の高い、何百万という人が住んでいるような大都市に対しても、ほとんど不可能だ。それは下水道以外に方法はないと思うのですね。

大都市というのはものすごいものですよ。大都市のものが生産している紙屑の量を考えてみてください。一ヶ月の森林の下へ一年間に降つてくる落ち葉、枯れ枝などの量と比べたら、一桁違うわけですよ。ですから、そんなものを先に作つてしまつた以上は、それを完全に分解することが可能になれば別ですが、ゴミでも排水でも最短

とから始まつて、たとえば自分の家の庭にトレーンチを掘つて家庭排水を土壤処理するとか、それから日本では土地がなくてできないでしょうが、湖に入つてくる水を全部一度大きな遊水池に溜めておいて浄化する、という方法がありますね、その程度のスケールのものまで含めてかなり幅広く考えていいと思うのです。ただし私は、エコ・テクノロジー万能とは思つてはいません。エコ・テクノロジーによって、大都市とか大工場地帯とかいうものまで受けられると思つたら大きな間違いです。それは下水道などの大規模技術でしか受けられないですよ。そういう大規模技術と、いろいろなレベルでの小規模のエコ・テクノロジーとをいかに上手に共存させるか、とうところに課題があると思います。

森本 つまり、水たまりの生態系からだんだん宇宙に繋がつていくように、それぞれそれぞのレベルにあつた技術、それらが集まつて一つの大きなまとまりへともたらしていく、ということですね。だから、先ほどの便所の話ではないですが、水洗便所にしてそれさえもわざわざ下水処理場に持つてくる。そうすると、下水処理場

距離で最小限度でとにかく処理する以外に方法はないのですね。

大都市問題と人間の未来について

森本 大都市はこれから開発途上国を中心に世界的にかなりの勢いで増えてくる、という話がありますね。

吉良 先進国の方は、都市の成長はかえつて止まりましたからね。今後も、都市への人口集積は進んでいくでしょうが、先進国はそれなりにちゃんとした技術でそれを受けていくと思いますので、余り心配はないのですが、一千萬都市が途上国のあるところにできそうな勢いでしょう。そんなところにはもちろん下水道はありませんしね。

森本 そうですね。スマラムができる、農村が荒廃するから大都市に出てくる。飲み水がない。ゴミの問題がある。西暦二〇〇〇年になりますと、ベスト十五ある大都市のうち、十三が開発途上国にあつて、サンパウロは二千六百万人、リオ・デジャネイロは三千百万人の人口になると言いますね。

吉良 そうですか。三千百万人ですか。

森本 人類の未来はそういう意味からすると、大変な問題がありますね。やはり、広い国土があるわけですから適正規模で配置してうまく環境とも調和のとれた都市のために先進国はプランを競いあつて、それでそういう所へ移住したり人を集めるような空間活用などを考えないとやはり厳しいですね。ものの流れが集中してしまえば問題は大きくなりますので、ある程度バランスがとれて適正になればその危険は少なくとも避けられると思うのですが、これをやるとなると、やはり抵抗も大きい、と思いますね……。

吉良 まあ、その人達をどのように食わせるか、といふことが大問題ですからね。

農業というわけにはいかないし、そうすると第一次、第三次産業で食わさなければならない。ついこの間も、ブラジルの友人がやってきまして、知恵を貸してくれ、というんです。何かと言うと、アマゾンに鉄鉱がたくさん見つかって、これから十二カ所の鉄の鉱山を作るという。もう、すでに二つが稼働寸前まで来ている。そして、

的に必要なのかな、とも思つのですがその辺はどのようを考えればよいですか。

たとえばドイツのように、森は日本に較べて少なくて、非常に森を愛して経営している。逆に日本では手の入らないような森が多くあるにもかかわらず、森を愛するということが少し弱い、ということがあるんですが、この状態で森をおいておくのは必要だとは思うのですが、その辺はどう考えればよいですか。開発していくいろんなものに使つていった方がそれは便利かもしれませんがない……。

吉良 森林を利用はしても、森林は森林のままでおいておくことが必要だという点に関しては、大体、異論がないと思うのですね。

それはどうしても必要なことで、地球全体として、少なくとも今くらいの森林面積は減らさないようにして、いわば自然林としておいておく。ただ、自然林といつても、利用せざるを得ないでしょうね。

その全部を何もないで原生林保護区にしておく、ということはできませんね。いわゆるサステナブルに、すなわち自然の構造は本来のままに保つておいて、そこ

精錬のエネルギー源はすべて木炭でやる、というのです。

まわりの森林を順番に切つて炭を焼いて回転させていくと、何十年か経てば、また森林が復活して、炭を焼けるようになっているはずだ。それでやつていくことはもう決まっている。しかし、誰もそんな経験のある人がいないし、何年経つたら、炭に焼けるような森林が復活するのかもわからない。だから知恵を貸せ、というのがいますが、そんなことに知恵の貸しようがないんですよ(笑い)。今

の開発途上国はそういう状態ですからね。大変なことでよ。とにかくブラジルだけで毎年、ちょっとした東南アジアの国一つ分くらいの人口は増えますからね。

森本 ブラジルなんかの場合は、インディオの問題が複雑に絡んでいて、その人々は人間のいわゆる“生物としての人間”的な生活をして、原始狩猟社会のような生活をしているんですが、アメリカにおける白人とインディアンとの争いのように、そうした人々のことがほとんど考慮されないで進んでしまうという事実を考えた時に、開発ということは確かに生活水準を上げるのですが、そればかりではなくて自然のままの状態というのも絶対

から過度にならないように林産物を収穫する、という利用の仕方はせざるを得ないだろうと思います。ただし、それが本当に実行できるかどうかは別問題です。

森本 ナショナル・トラストというのがあって、これは自然には手をつけない、というものですね。

吉良 必ずしもそうでもなくして、たとえば人間が適当に管理することによってできている牧場みたいな自然も価値があるからそのまま残して置こうという場合も、トルストの対象にはなっています。したがつて、そういうところは、昔からそこで羊の放牧をしているおじいさんなどにちゃんと謝礼を払つて、その代わり普通り放牧をしてもらう、というようなところもあるみたいですよ。日本も、そういうふうに人間が手を加えることによって維持されているような二次的な自然でも、ねうちのあるものは残しておきたい、田園風景のようなものも残しておきたい、ということになつてくるでしょう。

森本 かつて、「セイタカアワダチソウを弁護する」という論文を読ませていただきましたが……。

吉良 まず、花粉症の原因だというのは冤罪であると

いうことが一つ、それから、空き地で放つておけば、煉瓦や瓦のかけらでがらがらしているだけの空き地を、人間が何とかするまでの間、とにかく、緑ときれいな花でうずめてくれるのがなぜ悪いのか、そういう感じですね。

森本 それはやはり何でも雑草は悪いという考え方がある問題ですね。つまり、雑草はまず自然の中に多様にある生物として生えてきて、自然を作り上げていく重要な役割を担っている、というようには見ないために、雑草を薬剤で全部殺してしまい、それに止まらず、他の土壤生物まで殺してしまうことになる。

吉良 今の日本人はそういう意味では、手がつけられないくらい農耕民族ですよ。水田民族という方もいますが、それほど雑草が嫌いなんですね。耕地の雑草の場合は、人間の植えた作物があつて、その中に入つてくるものですから、雑草を取るのは当然なんですが、自然に生えているものも全部雑草扱いになるんですね。たとえば、川原に背が高く草がはえているのもいやなんですね。あんなに草を生やしておいていいのか、と今は行政に対しても苦情を言う。昔はみんなで刈ったわけですが。考えて

みれば不思議な話だ、と思うんです。何の実害もないのですから。刈らないと子供がマムシにかまれるようなことも昔はあったのですが、そんな必要がなくなつても、人間が植えたものでない植物がはびこっているのが気にいらない、というわけでね。日本人はドイツ人のように、森の中のウォーキングを楽しむということはほとんどないでしよう。そういう意味では手がつけられないくらい農耕民族なのです。昔はそんなことはなかつた思うのですがね、山に住んでいる人は随分いたんですから。何か農耕民が山岳人をすっかり征服してしまつた、という感じですね。

森本 我が家にもうすぐ四歳になる子供がいて、絵本をよく読んでやるのですが、おじいさんは山に芝刈りに行き、おばあさんは川へ洗濯をしに行った、このような話が現実とはかなり異質な世界の話になりつつある。子供の育つてくらなかでの環境の話というのは非常に多いのですが、たとえば擬人化して兎に人格を与えたり狸に人格を与えたりするのですが、自然との触れ合いの話が大分あると思いますが、そういう意味から考えますと、

やはり、そういう環境が残されていないとすると、人間として優秀な人間にはなるのでしょうか、思いやりなどの人間としての徳というか心の豊かさというか、そういうつたものが欠けていくようと思うのですがね。

吉良 先ほども言いましたように、この時代に大人になつていく世代は、かなりやつかいなことになるかも知れません。だけど、人間なんてのは容易に変わるものではない、というのも事実ですね。日本人の持つている日本的な特徴というものが、今の世代や次の世代の間になくなつてしまふ、とは私は思わない。やはり、それは保存されいくでしょう。だから、一世代や二世代くらいは、今我々からみれば、何たる連中だ、と思うような時期があるかもしれません、それはいつまでも続かないし、ある程度は修正されていくであろう、せざるを得ないであろう。だが、かなりひどいことにはなると思いますよ。

森本 幼児期にどういう人間になろうとかどういうものを求めようかとかという模範や理想、希望がなくて、ただ一生懸命勉強することが尊いとかお金持ちになるの

が尊いとか、という価値観だけで育つていくから、結局、企業戦士になつて日本でだめなら外国に行って、というようなことになるのではないかでしょうか。

吉良 そうなればまだしもですが、それはならないと私は思いますよ。会社人間、企業戦士的な人間が、減りはしても、なくなることはないと思いますが、むしろ、そういうことより、さつきおつしやつた思いやりとか対人関係といったところで、思ひがけないことが起こるのではないかと予想しているわけです。

ちょっととした家庭生活とか、新しく結婚した一人がなかなかうまく夫婦になれないとか、そういったところで欠陥が出てくるのではないですか。今、中国では子供は一人でしよう。今の夫婦は大体収入の半分をその一人の子供のために使つてゐるそうです。そして、子供のことを小皇帝という。つまり、何でも言うことを聞いてやるわけですね。年配の人たちは、あの子供たちの世代になつたらどうなるかと心配だといつています。両親もいろいろ気を使つていて、この週末は父方のおじいさん、おばあさんのところへいつたら、次の週末は母方のおじい

さん、おばあさんのところへ行く。で、いつでもその中に小皇帝がいるのです。そのようにして育つた子供は対等な対人関係のぎくしゃくした人間になり、うまく人と協調して何かをやつていけなくなるのではないですか。日本の今の子供も多分にそれに共通したところがありますね。

私の知っている範囲でも、若い新婚の夫婦がどちらもそんなに特別な人間ではないのに、うまく折り合えないという例があるんですね。ちょっととした小さなことで、折り合えない。そういうレベルでいろんなことが起きてくるのではないかと思います。

森本 たとえば戦争なんかも人格の破壊から起ころうけですが、環境のことをやつていて、もし戦争のような緊張状態がやってくるとこれはものすごい大きな問題ですね。もし戦争がなくなつてくれると、これは環境問題にお金を使えることになりますから、大歓迎である。そこからいえば、戦争と環境というのは大きな関連性があるということになりますね。それは一人の人間の思い描く世界といふものがみんな大きくなつて地球を変える、

こういうことが鍵になつていくと思うのですが、技術が先にあるのではなくて、どういう世界を作ろうとするかということが大切であると思うのですが……。

吉良 そうですね。地球環境の問題は本当に厳しくてさるような事態が本当に現れたら、これはものすごい摩擦のたねとなるでしょう。もう一度、戦争を起こすくらいの摩擦になるでしょう。世界全体が協調してみんな仲よく辛抱しましよう、ということにはなかなかならないでしょう。

森本 環境問題の場合には結果の出たときには、もう手遅れであるというようなことが多いのですから、事前に言うことは聞いてもらえない、結果が出て初めて気がつくという、いつも後追いであるとすれば、人間の愚かさがもろに環境問題として、戦争もそうですが、見せつけられるような思いがします。

吉良 戦争の可能性というのはなくなつていなければ、これまでのようないくに先進国の中に大きな勢力が二つとか三つとかあって起こす戦争のパターンではなくつ

ていきそうな気がします。これからは先進国が生き延びていくために後進国を叩くというパターンも、非常にあり得ると思いますね。

森本 それは難民の問題で私は感じたのです。ボート・ピープルの例では、日本が島国で浮かんでいる、食べ物もある、いろんなものがある、そこへ困った人がきた時、日本自体が沈んでしまうから乗るな、と言つてすべて振り落とし、蹴落とす、というような行為をしているように見えるのですがね。ある意味ではやむを得ないのでしょうか、それとも受け入れていくようにすべきか、どうなのでしょうか。

吉良 とにかく受け入れざるを得なくなるでしょう。

蹴落とせるものとはちがいますからね。ただ日本は政府が無策で、そういうときにきちんと受け入れるルールを作れない。よその国の政府はもつと上手ですね。

その国に住み着く人もいるでしょうが、適当に出でいくシステムを上手に作っている。それを作らないとやはり無理ですよ。一般の人が反発するのは無理もないと思いますよ。生活習慣も何もかも全然違うから腹も立つし、

エコロジーに対する東西の価値観

森本 環境問題の裏にある個人の人間の行動というか

価値観ということが大事であると思うのですが、思いやりがないとどんどん環境は破壊されていくことになるでしょうし、他人に対する思いやりがないと戦争が起ころうとしている。やはり共生をはかつていく価値観が教育の中にどのように植えつけられていくか、ということが大きいと思うのですが、仏教的な観点から言いますと、全

てのものごとが因果というか縁起でつながっていて、ど

の存在も尊厳性をそれぞれ持っている、いわゆる生態学的な観点にうんと近い、と思うのですが、たとえば、ニ

ューサイエンスと東洋思想、という形で現れるように、

ものから見るのはなく、一人の内面と物質、宇宙とが

繋っていくような調和というか関係性を求める価値観や

方向性が出てきているように思うのです。で、環境問題

を論じていく時に仏法にいう「依正不二」という観点が

ありますて、先生が最初に言わされたような、主体と環境

とは一体で動いている、という観点が折り込まれていて、

全てのものが関連している、それは一人の人間(正報)の

行動によって環境(依報)が作られていく、ということな

のですが、これからもう一度このような考え方が必要になつてくるように思うのですけれども……。

吉良 それはよくわかるのですが、その時にたとえば

歐米でもいろんな言葉を使っている。エコライ特という

のは、生物それぞれが尊厳性を持っているという考え方

で、医学用の実験動物に反対するとか、そうとう過激な

ことをやっている人たちがいる。一方我々は、エコロジ

カルにものを見ている他に、もともと子供の頃から仏教思想に影響を受けているところがある。また、その

もう一つ前に、もつとひろいアニミズムが日本人にはある。もちろん我々は自然科学者なんですけれども、もと

からもつてあるアニミズムや仏教思想に影響されたよう

な自然観と、生態学の考え方とが交わっているところが

あります。それに対して、我々が考えているエコロジー

かバイオライ特とかエコライ特とか言って、いろいろや

つっています。それに対して、我々が考えているエコロジーには東洋的な思想の色が付いているとすれば、この東西

双方の流れを突き合わせるとどういうことになるのか。

不勉強で、ヨーロッパ的な新しい哲学をまともに書いた本を読んだことがないのでよく分らないのですが、一度誰かがどこかきちんと対決させてほしいですね。相

当違うと思うのですが……。

森本 やはり、近代科学が生まれてきた背景には合理主義があり、そのまた背景にはキリスト教やアリストテレスの哲学があつて、そういう流れの中で、近代科学が

自然を征服してくる、それが世界の大きな流れとなつて

世界を覆っている。片や、調和を訴えている東洋が自然と共に存してこれまでやつてきた。しかし、西洋の考え方でやつてきた日本はたしかに経済や技術では発展して先進国になつた。ですがここにきて、その行き過ぎが反省されてきて、もう一度、生態的な調和を取り戻そうと

いう考え方があつってきた。もつともこの考え方は仏法の中にもとあるために、もう一度仏教思想が脚光を浴びているかと思いますが、自然と人間の関係においてこれらから必要な価値観というのは科学技術信仰というよりは共存、調和、先生の言葉でいえば自然との「妥協」の思想であるようと思うのです。

吉良 我々はあつさりそく結論してしまったのです

が、我々の考え方の一方の源流は明らかに西洋にあるわけで、そちらの人達はその結論をそのまま受け入れるのかな、という気がするわけです。たとえば、彼らに較べて我々の方がよりエコロジカルじゃないか、と私などはひそかに思つてゐるわけです。向こうの人達は実験動物に反対で、医学の研究所に入つて、実験動物を殺がしたりしている。しかし、我々はそういうことはしない。

我々の論理としては、彼らが、そのようなことをしながら毎日ハムを食つていていいのか、とすぐそう思うわけですね。

我々の方では、動物と植物の区別すらなく、すべての山川草木に同じように靈があると思つてゐるわけです。だから、動物と植物とを区別する理由を持たないし、人間への近さという点から動物を序列化する必要も全くないわけですね。では、生き物を一切食わないかというとそうではなくて、人間が生きしていくためには、そういうものを食べざるを得ないというエコロジーの法則はちゃんと認めています。それで動物を殺すときは、手を合わせて念佛を唱えるくらいですむ。また、年に一度は医用動物の慰靈祭をやつて割り切る。向こうではそういうことはしない。全部の人がそうだというわけではありませんが、実験動物に反対していけば、そのうち肉食は止めざるをえないというところまでいくことは必然のようになります。これは双方で相当違うのです。総にはならない。ひょっとすると、これから将来の環境を考えていこうとするならば、この両者のへだたりや違いが具体的

的な行動にも影響してくるかもしれない。ですから、どなたかに一度、思想的に違いがあるのかないのか、あるとすればどこにあるのか、きちんと分析していただきたいと思いますね。

森本 そうですね。今、先生の指摘された事柄について私も、微力ながら努力してまいりたいと思います。本日はお忙しいところ、長時間にわたってありがとうございました。

(きら たつお・滋賀県琵琶湖研究所長・大阪市立大学名誉教授)

(もりもと けんいち・信州豊南女子短期大学教授)